



新見市男女共同参画情報紙

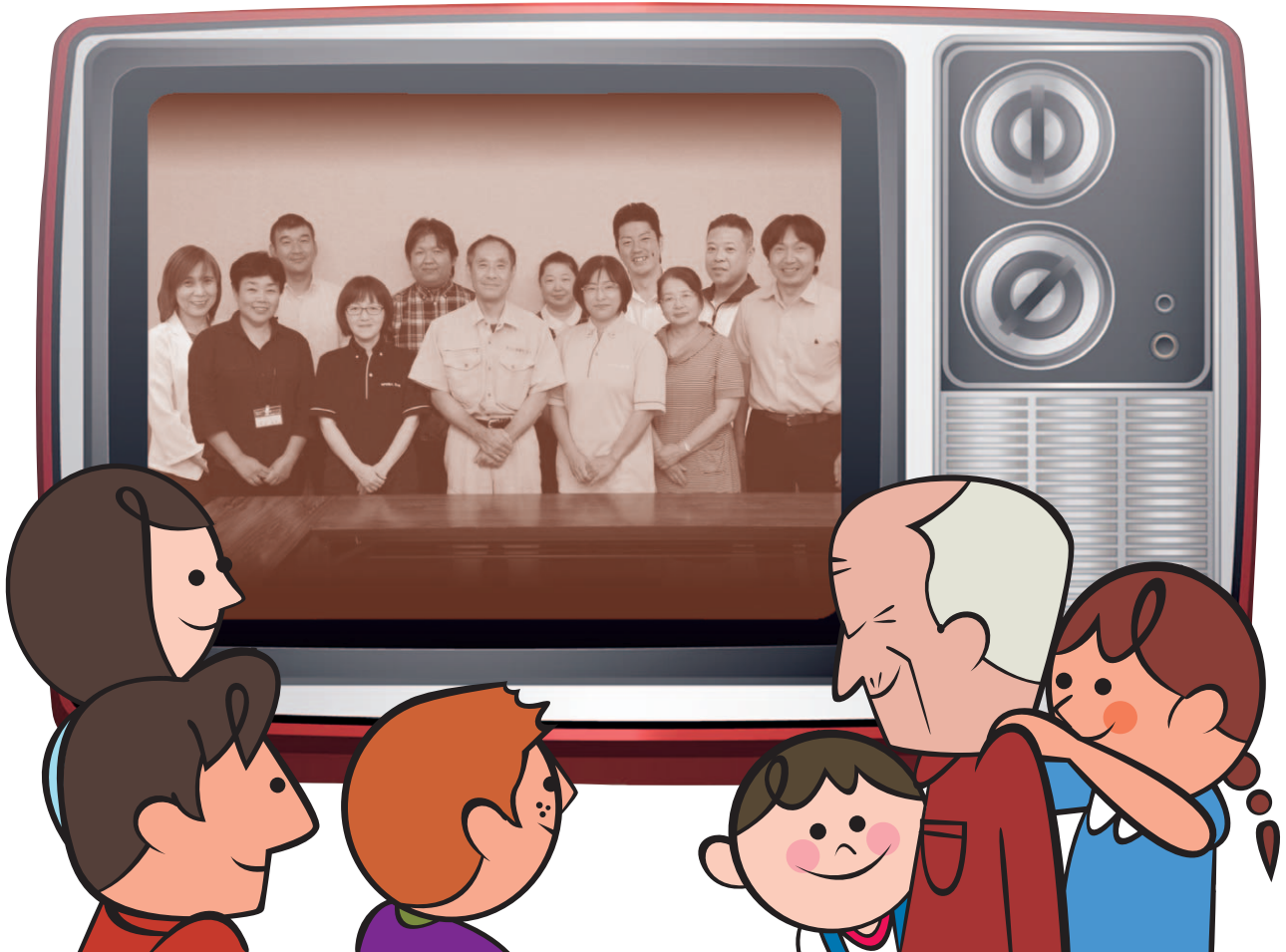
りぼん

vol.24
2017.8



昔も今も
家族への『感謝と思いやり』は
男女共同参画への第一歩!

今回の『りぼん』は、“テレビ番組から見えてくる男女共同参画”に
スポットを当て、編集委員がさまざまな角度から考察します。



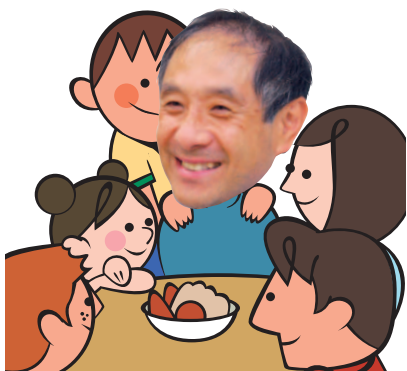
今回、メディア（テレビ番組）と男女共同参画というテーマを考えるきっかけとなったのが、2016年秋に話題となった『逃げるは恥だが役に立つ』、いわゆる『逃げ恥』というドラマでした。

内閣府男女共同参画局の広報誌「共同参画」2017年2月号でも同ドラマが取り上げられ、多様な恋愛観、結婚観、男女の働き方、性別による役割分担、夫婦のあり方等について世間の話題にあがるなど、大きな社会現象となりました。

そこで今回は、テレビドラマやアニメなどの『メディア』に着目し、男女共同参画を考えてみたいと思います。



森本委員



川本委員長

国民的アニメ『サザエさん』 1970年代の考察

サザエさん一家の、三世代同居の家族構成、家庭内の仕事については、分担されているように思えます。家事全般は、フネ、サザエが行い、特に波平やマスオが台所に立ったり、洗濯をす

ることはないでしょう。その代わりに、日曜大工などの力仕事は主に男性の仕事であるようなので、そのことで不平不満があるように見受けられません。いたって家庭内は、順調に日常が流れているように思えるんですよね。

ご近所さんとも仲が良く、子どもたちの学校生活についても何ら問題があるようには感じられません。

サザエさんは古き良き昭和時代の家庭の典型ですが、男女共同参画の視点からみると「男女」の作業分担がきっちりしていて、時代遅れと言われても仕方ないかもしれません。

全体的にほのぼのとした物語であり、心休まる日曜の夕方

癒し系のアニメですが、僕にとってはテーマ音楽を聞くと、気持ちブルーになるのは気のせいだろうか…
後半へ続く。



前田委員

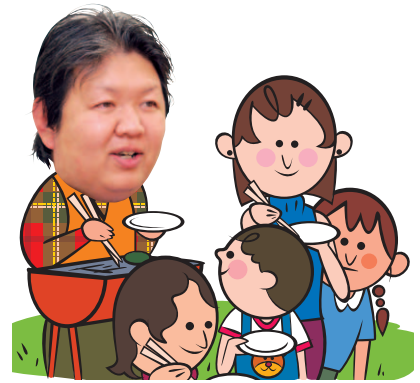
国民的アニメには 壊せない雰囲気がある

昔ながらのアニメであるサザ

エさんは、男は仕事、女は家庭という分担制を強いていた時代を反映していると思います。昔からの流れは変わらず、現代の生活に合った形、例えば、サザエさんが働きに行ったり、マスオさんや波平さんが家事をしたりすることは、このアニメ的に合わないのかなと思います。

国民的アニメと言われるちびまる子ちゃんやクレヨンしんちゃんなどの作品も、全体的に男は仕事、女は家庭のイメージがあると思います。

家庭での出来事や、子どもとのからみを無理に現代の男女共同参画の視点に合わせることは、そのアニメの雰囲気を壊すことになるのかもしれませんがね。



小川委員

サザエさん一家が
皆に親しまれる理由

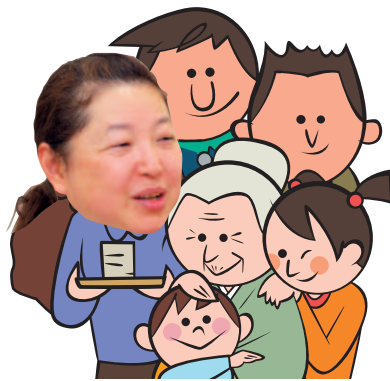
男女共同参画社会と云えば、サザエさんのお宅でも、波平さんが炊事・洗濯に忙しく、マスカさんも休みを取ってタラちゃんの育児をして…となるのでしょうか。

ところが、実際にテレビの中のサザエさん一家は、昔ながらの家長制度さながら、波平さんが家事を強いる様子もなく、それでいて物事の決定権は波平さんが持っているように見えます。しかしながら、そんなサザエさん一家が幾久しく放送され、皆に親しまれているのはなぜでしょうか。

私は、それは、サザエさん一家全員が、互いに思いやっ

る雰囲気醸し出しているからではないかと考えています。家族という社会の最小単位において、「感謝」や「思いやり」は欠かすことのできない「キー」だと思います。

つまり、サザエさん一家は、一見して男女共同参画社会とは無縁に見えても、実は家族がそれぞれでできることで助け合っており、感謝し合い、思い合っている家庭なのではないかと思えてなりません。



森本委員

強制ではなく
共生できる「男女共同参画」

最近、サザエさんは「時代遅れ、専業主婦はおかしい、サザエさんは働くべき」と考える方

も多いと聞きます。

しかし、男女共同参画は専業主婦を否定しているわけではありませんが、例えば、もしもサザエさんが働きたいのに、働かせてもらえない場合には、その時こそ男女共同参画の出番であり、サザエさんが専業主婦を希望しているのであれば、その意志を尊重するのが男女共同参画なのです。サザエさんが、タラちゃんを保育所に預けず、自分で育てるのもサザエさんの意志であれば、尊重されるべきです。

昭和と現代の男女共同参画の違いは、ドラマ番組においても垣間見ることが出来ます。

昔のドラマは、男社会に女性が進出する場合、女性が男性化していました。女性上司の役などはトゲトゲした感じで表されていたような場面も多かったように思います。

現代のドラマでは「女性の視線を活かした、女性ならではの視点」で社会に進出する設定が多いかもしれません。男女共同参画を語る上では「男らしさ・女らしさ」は否定されてしまいません。しかし、「男らしさ・女らしさ」も個性のひとつと考えれば、それを選択する人も尊重

してほしいものです。

「男らしさ・女らしさ」という言葉がいけないのであれば、「力強さ、柔らかさ、柔軟さ、細やかさ」など、求められる姿勢を具体的に示していくべきなのではないでしょうか。

強制ではなく、共生できる「男女共同参画」であってほしいと願っています。



朝ドラ『あさが来た』
こころの考察

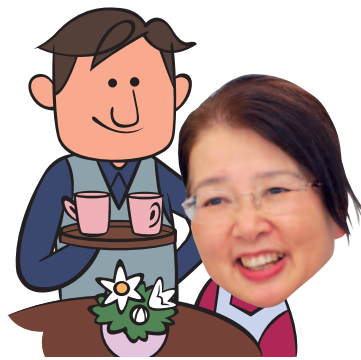
再び川本です。

時代は、江戸末期から大正にかけての物語。姉妹が嫁いだ先の家庭事情から対象的運命をたどることになります。結局、どちらもハッピーエンドで終わるのですが…。

当時は男尊女卑の世相が色濃く残る時代。主人公の「あさ」

が女だてらに男の仕事に興味を持ち、自分の意見を主張することができたのは、嫁ぎ先があさに対して男女の分け隔て無く理解を示したことが、最も大きな要因だったのではないかと考えます。また、夫の新次郎も後ろ盾となり、協力を惜しまなかつたことも見逃せません。

強い信念、先見の明を持ち、道を切り開いていった主人公がいきいきと描かれていると思います。まさに「びつくりぼんや。」



渡邊委員

朝ドラと男女共同参画

「あさが来た」「まれ」などNHKの朝ドラの主人公はほとんどが女性で、さまざまなき方や一生を見せてくれています。

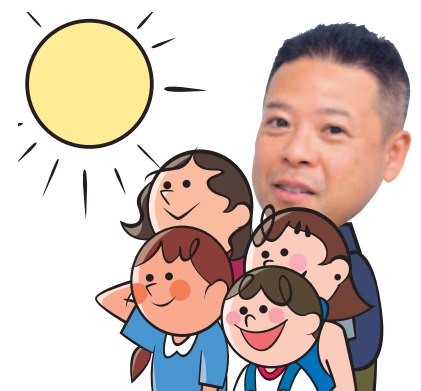
特に「あさが来た」では、ヒロイン白岡あさは、明治時代の

「日本の女性企業家のパイオニア」の広岡浅子がモデルで、女性の社会進出が珍しい時代、銀行や保険会社の事業を起こしたほか、日本で最初の女子大学を創設しました。女性の教育の必要性を早くから説き、尽力をつくしたことは、並々ならぬ努力であつたと思われまふ。

現在、日本は先進国の中でも、社会において女性の活躍がまだまだ進んでいないようです。

政府が「一億総活躍」をスロガンとして掲げていますが、新見市も人口減少と高齢化が進んでいるなか、男女共同参画の重要性を市民が意識し、豊かな人間関係を築き、男女が支え合いながら生活できる地域づくりができるというのではないのでしょうか。

「朝ドラ」は、私たちにそれを提起していると思います。



谷岡委員

メディア全般について思うこと

メディアも男女平等を意識していると思いますが、それをあえて意識せずに番組が作られる時がくれば、それが本当の「男女共同参画社会」だな、と思います。

日本の放送局は、女性を意識するあまり、女性を持ち上げ気味のような気がします。その「持ち上げよう」とする意識自体が、未だに「男女共同参画社会」として成熟しきれていない証拠ではないかと感じます。なんだか女性もメディアに踊らされているような感じがする場面もあります。「男女共同参画社会」が空気のように、あたりまえに感じられるようになると良いと思っています。

編集後記

編集委員長 川本 太間

今回は、テレビ番組に着目して、委員それぞれの意見を載せてみました。思いを文章にすると、ニュアンスが違ったりして、活字で表現をすることの難しさも痛感しました。

各委員の大半を占めた意見として、あまりにも、男女参画が独り歩きして四角四面になっている。家庭内で協力していることが参画の原点ではないの？といったものでした。コミュニティの最少単位を家族ととらえるならば、納得の答えに思えます。この編集後記執筆中に心痛む出来事が報じられました。かねてより病魔と闘っておられた歌舞伎俳優「成田屋」の奥様が若くしてこの世を去られました。

ここ数年はつらい闘病生活や家族への思いを、メディア媒体を通して発信されてきました。その率直な気持ちに触れ、共感を抱き奇跡が起こってほしいと思つたのは僕だけではないと思います。

最期は自宅で、ご家族や身内の方々に見送られながら旅立たれたそうです。梨園の妻としてだけではなく、母として一人の女性として、たくましく生きた生涯であつたように思います。